

第4学年1組 国語科学習指導案

平成28年11月10日(木) 第5校時

4年1組教室 (児童数38人)

指導者 教諭 阿部 慎一郎

- 1 単元名・教材名** この物語「〇〇な話」、どんな話? ―読後感とその理由を考えよう―
「プラタナスの木」椎名誠(光村図書4年下)
「白いはなびら」(教育出版3年上)
「ピータイルねこ」岡田淳(三省堂3年)
「走れ」村中李衣(東京書籍4年上)

2 児童の実態と本単元の意図

(1) 児童の実態と教材観、指導観

本学級の児童はこれまで、物語教材「白いぼうし」の学習において、3年生の「モチモチの木」で学習した人物像をとらえて読むということを生かし、場面の移り変わりに注意しながら、中心人物の心情を想像し、人物像を考えるという学習に取り組んできた。シリーズになっている登場人物「松井さん」が出てくる本を並行読書し、中心人物の人物像をより豊かに想像するという活動にも取り組んできた。また、物語教材「一つの花」の学習においては、「どうして「一つの花」という題名なのか」という課題の解決に向けて、「一つ」という言葉に着目したり、コスモスが咲いていた場所と、家族とを比較して考えたりすることを通して、叙述を基に想像して読むという学習に取り組んできた。今後はさらに、「物語を読む観点」¹を増やしていき、叙述を基に想像して読む力を伸ばし自分の考えをもちながら、一人一人の感じ方には違いがあることに気付くことができるようになることを期待している。

本教材「プラタナスの木」は、中心人物の会話文が一つもなく、会話から直接心情を想像することができない作品である。したがって、「中心人物とは、自分から積極的に話したり行動したりしている登場人物」という既習の原理・原則は適用されない。しかし、中心人物についての記述が多いことから、児童は中心人物が誰かということはたやすく理解できるだろう。「中心人物とは、会話文がなくても、より詳しく心情が描かれている登場人物」というものに、原理・原則をアップグレードしていくことになる。会話や行動の少ない作品から、中心人物の心情を想像するためには、「誰によって語られている作品なのか」という「視点」という読みの観点の獲得が必要になってくる。中心人物の視点で描かれている情景描写を通して、中心人物の心情を想像していく。このことについては、「ごんぎつね」で学習しているが、「視点」については児童にとって初めての学習経験であるので、繰り返しの指導が必要である。この作品の中で変わるものは、中心人物の「プラタナスの木への認識」であり、対人物である「おじいさん」の言葉が、中心人物のプラタナスの木への認識を変えていく。授業者は、「変わ

¹ 物語を読む観点…筑波大学附属小学校国語教育研究部『筑波発 読みの系統指導で読む力を育てる』(東洋館出版, 2016.2.18)を参考に、7つの「読みの系列指導」を基に指導に当たっている。7つの「読みの系列」とは、文学においては①「作品の構造」系列、②「視点」系列、③「人物」系列、④「主題」系列、⑤「文学の表現技法」系列、⑥「文種」系列、⑦「活動用語」系列、である。

る」という言葉を使っているが、今までのような明確な心情の変容といったものではなく、今までなかった認識が新たに加わってくるという意味での「変わる」ととらえている。児童にとって、中心人物の会話文がなくても、中心人物の視点を通して描かれた叙述を基に、中心人物の心情を想像することが指導できる教材である。

指導に当たっては、小学校学習指導要領の第3学年及び第4学年の「C読むこと」の言語活動例「ア物語や詩を読み、感想を述べ合うこと」を通して、指導事項「ウ 場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと」を重点的に指導するものである。具体的には、三人称限定視点で描かれた作品を読んで、「語り」から中心人物の心情を想像していく活動を設定している。この活動を通して、だれの「視点」から語られているかという読みの観点を獲得、または確認し、情景描写に着目しながら読む、いわゆる「視点系列」の読みの指導をねらっている。しかし、「視点」で読むことは手段であり、児童の直接的な活動の中心となるのは、中心人物の変容をとらえる、「人物系列」の読みの指導である。

本単元では、初発の感想を書き、その感想がどの部分から受け取った感想なのかということを整理していく。感想が複数集まっている部分が、児童にとっては琴線にふれた部分でもある。しかし、この段階では、理由は上手く説明できないだろう。そこで、感想が複数集まった部分には、「何かはわからないが、作者のしかけ（伏線）があるのだろう」ということを考えて読むという学習経験をしてきている。児童の感想を児童自身が整理することで、読むべき課題を見出すという「読み方」を学び始めている。教師が手引きながらではあるが、児童自身が学習課題を設定できるようにしていく。児童の感想で多く予想されるものが、「おじいさんの存在」についてだろう。そこで、児童の感想を整理することを通して、「おじいさんの存在は必要か？」という学習課題が設定できるだろう。考えの交流を通してその課題の解決に取り組んでいく。まず、「作品で大きく変わったものは何か」という課題に対して、文章の構造をとらえながら明らかにしていく。次に、「それは、どうして変わったのか」という課題に対して、対人物の言葉を中心に、会話や行動で直接語られていない中心人物の心情を、「語り」から想像することを学習する。「プラタナスの木に対する認識の変化」という共通の課題に対し、根拠となる叙述を示しながら考えていく。中心人物である「マーちゃん」と対人物である「おじいさん」、そして題名にもなっている「プラタナスの木」の関係を人物関係図型の図で可視化しながら、つながりを考えていくようにする。また、交流を通して、「そんなところからも、中心人物の気持ちは想像できるのか」「同じところを根拠としているけど、想像したことが違う」ということを経験させ、考えを広げる。さらに、「自分の考えたことより、友だちの考えたことのほうがびったりくるかもしれない」といったように、考えを深めるようにもしていきたい。そのために、共感的な学び合いの雰囲気の中で、共通の課題に対して考えが検討されるような交流の場を設定する。終末には、「プラタナスの木」と同じように「三人称限定視点」で描かれた物語を複数読む。その中から「三人称限定視点」で描かれた物語を選び（ねらいが「視点」自体を学ぶことではないので、扱う教材は全て「三人称限定視点」なのだが、児童はどれが「三人称限定視点」か、ということを考えながら選ぶようになる。そこには、正誤はなく、児童が選んだ教材全てが「三人称限定視点」となる仕掛けである）、中心人物がどのように変容した話か、ということをとらえて読む言語活動を設定した。並行読書をしていきながら、教科書教材以外の物語を対象に身に付いた力を生かして読む、いわゆる「入れ子構造」「ABワンセット」という指導法も考えられるが、今回は「ABワンセット」等の指導法に縛られることなく、本単元で

は、教科書教材を学んだ後で初めて複数の教材を読む。「視点」に着目して読み、「三人称限定視点」の作品を選ぶことや、作品を読んで、中心人物の変容をとらえることを通して、身に付けた力を活用できる場を設定する。さらに、単元内にある教材だけではなく、次の単元の物語教材で学ぶときも、読みの観点を生かして読むという長期的な活用を場を意識させることで、思考力・判断力・表現力を高めていくようにする。

(2) 「アクティブ・ラーニング」との関わり

中教審初等中等教育分科会教育課程部会国語ワーキンググループ「国語ワーキンググループにおける取りまとめ（案）」（平成28年5月31日 教育課程部会国語ワーキンググループ 資料3）には、「4. 学習・指導の改善・充実や教材の充実」の「(2)「深い学び」、「対話的な学び」、「主体的な学び」に向けた学習・指導の改善」という項目があり、以下のように説明されている。

言語能力を育成する国語科においては、言語活動を通して資質・能力を育成する。つまり、資質・能力の育成を図るための活動の全てが言語活動と言える。質の高い言語活動を行い国語教育の改善・充実を図るためには、「アクティブ・ラーニング」の三つの視点から以下のような学びが実現できているか、その学習過程の質的改善を不断に見直し続けることが重要である。²

続けて「取りまとめ（案）」では、

- i) 習得・活用・探究の見通しの中で、教科等の特質に応じた見方や考え方を働かせて思考・判断・表現し、学習内容の深い理解につなげる「深い学び」を実現できているか。
- ii) 子供同士の協働、教師や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自らの考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。
- iii) 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。³

という、学習過程の質的改善のポイントを挙げている。

アクティブ・ラーニングは指導の型ではないものの、アクティブ・ラーニングを発生させる指導の方法として、先行研究では「ジグソー法」「反転学習」「課題解決型の学習」などが、その例として挙げられている。本単元では、「課題解決型の学習」を取り上げることとした。「課題解決型の学習」では、課題を「何に」「どのように」「いつ」設定するか等が重要となる。そこで、第18回国語教育研究会（2016.6.5 浦和コミュニティセンター）での青山由紀（筑波大学附属小学校）の講演『学習者に寄り添った課題とは』での内容を基に、課題について整理した。（当日配布資料参照）

(3) 研究主題との関わり

本校は、昨年度まで「生きる力としての国語力を育てる国語教室の創造」を目指し、国語科の研究を行ってきた。今年度は、国語力を生かし、研究主題を「基礎・基本の確実な定着を目指す指導法の

² 教育課程部会国語ワーキンググループ「国語ワーキンググループにおける取りまとめ（案）」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/068/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/06/08/1371887_3.pdf（最終閲覧日 2016/9/16）

³ 同上

研究～表現力を育て、学びを深める指導の工夫～」とし、算数の力の向上に取り組んでいる。

個人研究として、研究主題を「生活に生きてはたらく国語の能力を育成する指導法の研究—「習得・活用」により思考力を育成する文学的文章の学習指導—」とし、国語力の向上に取り組んでいる。以下は、研究の仮説とその手立てである。

研究主題

「生活に生きてはたらく国語の能力を育成する指導法の研究」
—「習得・活用」により思考力を育成する文学的文章の学習指導—

(仮説①)

系統性を明らかにした文学的文章を読む観点を学ぶことができれば、今学習している単元が終わっても、「習得」したことを「活用」して文学的文章を読むことができるだろう。

(仮説②)

国語科として育成が期待される思考力を明らかにした上で、思考するための方法を身に付ければ、思考力を育成することができるだろう。

(手だて)

- 「読みの系列」を段階的に習得
- ・先行研究から学び、「7つの「読みの系列指導」(筑波大学附属小学校国語教育研究部)を基に、系統的に「読みの系列」「読みの技能」「読みの用語」を意識して指導するようにする。特に、今年度は「読みの用語」を意図的に教室内に掲示し、定着を図るようにしている。
- 「読みの技能・用語」指導のタイミングの工夫
- ・形式的なことを初めに指導しすぎると、児童の自然な読みを妨げてしまうことがある。ねらいによって、学習前に「読みの技能・用語」を直接指導したり、「読みの技能・用語」自体には触れず学習を進め、学習後に意味づけをしたりし、形式的な側面にばかり重きを置かないようにする。

(手だて)

- 思考の方法の焦点化
- ・先行研究から、国語科で育成が期待される思考力として「拡散方向の思考力」「集約方向の思考力」が挙げられている。国語科では、「拡散」と「集約」に焦点化して、思考力を育成するようにする。
- ・先行研究から、頻出の思考の方法として、「比較する」「分類する」「関係づける」「多面的にみる」「構造化する」「評価する」が挙げられている。
- 思考ツールの活用
- ・思考スキルは概念的・抽象的であるため、そのままでは使いにくい。そこで、実際に児童が使うことを想定した、思考ツールの開発や活用が先行研究では行われている。
- ・本単元では、以下の思考スキルとツールを用いて思考力を育成するようにした。
- ※「 」内が思考ツール、()内が思考スキルを表す。
- 「全文シートへ感想カードを貼る」(分類・整理する)、「人物関係図(型)を書く」(関係づける)、「文章を比べる」(比較する)、「C D R表で考えを伝え合う」(多角的にみる)。

3 単元の見目標

- (1) 語り手の言葉や位置をとらえ視点を意識しながら、進んで作品を読もうとしている。
(関心・意欲・態度)
- (2) 語りを手がかりに視点人物の心情を想像することができる。
(読むこと)
- (3) 中心人物の心情の変容を、「変容前」「変容後」「きっかけ」を区別してとらえることができる。
(読むこと)
- (4) 言葉には、心情と景色を同時に表現しているものがあることが理解できる。
(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

4 単元の評価規準と学習活動に即した評価規準

(省略)

5 指導と評価の計画 (評価は省略)

時間	学習活動	学習内容	評価規準・評価方法
1	○「プラタナスの木」を読み、感想を書く。	○感想の観点 ・心に残ったこと ・もっと知りたいこと ・不思議に思ったこと	(関)
2	○全ての感想を読み合い、どの部分に着目している感想が多いのかを整理する。 (思考スキル「分類・整理する」) ○多く着目している部分を参考に、読みの課題を設定する。	○多様な考えの交流 ○考えとその根拠の結び付け ・感想の分類 ○課題の設定 ・感想が集中している部分からの課題設定	(関)
3	○物語の設定をとらえる。 (思考スキル「関係づける」) ○「語り手」の「視点」をとらえる。	○物語の設定の把握 ・登場人物の人数 ・中心人物 ・人がら ○語り手 (視点) ・だれの視点から語られているのかということ	(読)
4	○中心人物「マーちゃん」がどうなっていく物語か、おおまかにとらえる。 (思考スキル「関係づける」)	○物語の基本構造 ・誰が、どうなった ・変わったことは何か	(読)

5	○「新たな価値観を獲得」し始めていると思われる部分を探す。 (思考スキル「比較する」) ○マーちゃんとおじいさん、プラタナスのつながりを図に表す。 (思考スキル「関係づける」)	○中心人物の変容 ・変わる前との比較 ○語りから心情を読むこと ・情景描写（心情と景色） ○登場人物どうし（ある対象と）の関係	(読) (言)
6	○「おじいさんの言葉」に関係し、マーちゃんの内面が詳しく語られている部分を全文から探す。 (思考スキル「比較する」) ○マーちゃんとおじいさん、プラタナスのつながりを図に表す。 (思考スキル「関係づける」)	○語りから心情を読むこと ・情景描写（心情と景色） ○文と文の結びつき ○伏線 ・キーワード ・繰り返しの語 ○登場人物どうし（ある対象と）の関係	(読) (言)
7	○読みの課題に対する自分の考えを書き、考えを伝え合う。 (思考スキル「多角的にみる」)	○課題に対する自分の考えの構築 ○自分の考えの説明 ・三角ロジック型（考え・事実・結び付け）を使った説明 ○多様な考えの交流	(読)
8	○複数の物語作品を読み、「三人称限定視点」の物語を選ぶ。	○語り手（視点） ○語りから心情を読むこと	(関)
9	○選んだ作品の中心人物の変容を読む。	○物語の基本構造 ・誰が、どうなった ・変わったことは何か ○中心人物の変容	(読) (言)
10	○単元のふり返しをする。	○身についた力を意識すること ○転移可能な読みの力の確認 ・語り（視点） ・情景描写 ・伏線	(関)

6 本時の学習指導 (本時5 / 10時)

(1) 目標

○語りを根拠にして、視点人物「マーちゃん」の心情の変容について、いつ変わり始めたのかをとらえることができる。

(2) 評価規準 (中心となるもの1つ)

エ 読む能力
語りからマーちゃんの心情を想像し、心情の変容についてまとめている。

(3) 展開

学習活動	学習内容	指導と評価の創意工夫	時間
1 前時の学習を想起し、中心人物の心情のおおまかな変容について確認する。			2
2 中心人物の心情を想像するために必要なことを確かめる。	○語りから心情を読むこと	・「ごんぎつね」での学習を想起し、会話がなくても中心人物(視点人物)の気持ちは、語りから想像できることを確かめる。	3
3 本時の学習課題をつかむ。	○学習課題の設定	・中心人物の心情の変容をとらえる際には、「変容前」「変容後」「きっかけ」を区別してとらえることが必要になる。「きっかけ」をとらえるためには、「いつ(どの頃)」をとらえることが手立てとなる。「いつ」変容し始めたかをとらえられるようにする。	3
マーちゃんが、変わり始めたのはいつか？			
4 中心人物の心情が多く描かれている部分を選ぶ。	○語りから心情を読むこと ・視点人物 ○文章全体を読むこと	・心情が変容しているということは、心情について詳しく描かれている部分が存在する。心情が詳しく語られている部分を見つけることができるようにする。 ・「語り手がそう思って語っている人	5

5 ⑮と⑯を比べて、中心人物が変容したのはどちらかを選ぶ。	○言葉に着目すること	物はだれ？」と問うことで、視点人物＝マーちゃん、であり、語りの中にマーちゃん的心情が描かれていることをとらえることができるようにする。 ・⑮でも、おじいさんの顔を思い浮かべている。しかし、変容しきってはいない。「しだいにぼんやりしていく」や「いつしか深い眠りに落ちていった」という言葉に着目し、根拠としてあげられるようにする。	1 0
6 ⑯の中で、中心人物が変容したことを暗示している情景描写を探し、中心人物の心情と関係づけて説明する。	○情景描写 ・「台風は通り過ぎていた」 ・「青く晴れ上がった空」 ・「今は静かに太陽の光をあびている」 ・「鳥やせみはうれしそうに鳴き始めている」	・「ごんぎつね」の学習を想起させ、語り手が語る景色には、視点人物の心情が表れていることがあることを確かめる。 ・景色の描写を探し、それが何を意味しているのかを考え、中心人物の心情と関連させて考えるようにする。	1 0
7 中心人物が「思い出した」ものは何かを文章から探し、中心人物が悟ったことは何かをとらえる。	○文章全体を読むこと ○指示語 ○接続語の役割	・中心人物が変容した「きっかけ」だと思ふ部分を⑯から探す。また、それを引き起こしたのは、どんな出来事があったからなのかを考える。 ・「思い出した言葉」とは何かを、文章全体から探す。 ・「それがはっきりと見える」の「それ」とは何を指すのか、また、「だから」という接続語の役割を考えることで、中心人物が悟ったことをとらえることができるようにする。	1 0

9 次時への見通しをもつ。	○次時への見通し	評価場面 〈評価規準〉エ ・発言の様子 ・記述の考察 〈手立て〉 ・自分の考えがもてている児童には、「マーちんの心情が変わり始めたのはいつか。」という問いに、「出来事」と「きっかけ」、「悟ったこと」という観点を入れて、自分の考えを説明できるようにするよう伝える。 (例) マーちんの心情が変わり始めたのは、台風がおそってきた後で、その時、おじいさんの言葉を思い出した。その言葉から、一本一本の木とその根が、ずっと昔から森全体を守り、祖父母の家だって守ってきたことを悟った。 ・自分の考えをもてない児童には、「マーちんが思い出したものは何か?」「おじいさんの言葉とは、どんなことか、⑨から探そう」と、直接的に問うようにする。 ・次は、「マーちんは、悟っただけか? それとも、何か行動したか?」という問いを投げかけ、次時の学習への課題意識を高めることができるようにする。	2
----------------------	-----------------	---	----------

※ 展開中の白抜き○数字は、教材の形式段落番号を指す。